＊

名古屋から、岐阜経由で高山本線に入る特急列車に乗り、四十分ほど揺られると、美濃太田という岐阜県美濃加茂市の代表駅に着く。ここから車で五分ほど走った丘の上に、真新しい病院が建っている。

「中部国際医療センター」と看板を掲げたその病院は、今年一月、それまで「木沢記念病院」を運営して地域医療に当たってきた社会医療法人厚生会が、移転に合わせて病院名を変更したものとなる。

ここでは現在、陽子線治療のための施設が建設中で、二〇二三年の稼働を予定している。

エントランスを入ると、黒とグレーを基調にした「病院らしくない空間」が目に飛び込んでくる。一般的な病院の壁は「白一色」のイメージだが、明らかに趣を異にしたモダンな雰囲気を放っている。

「建築コーディネーターが北欧の病院を参考にして、日本の病院らしくない色合いを提示してきた。僕も一目でそれを気に入ってね」

そう語るのは、社会医療法人厚生会理事長の山田實紘氏だ。

一階のロビーは吹き抜けで、コンサートや美術展などの催事場としても使えるような造りになっている。敷地内にはフィットネスクラブや書店、カフェ、コンビニエンスストアなどが入居。最近は商業施設を持つ医療機関も増えてはいるが、その多くが入院患者向けだ。ここでは患者と一般客の動線を分けることで、近隣住民が気軽に立ち寄れる造りになっている。病気の時に行く場所ではなく、人の集まる場所としての機能を持たせようという、山田氏の考えによるものだ。その思想は、施設の名称にも表れている。

「病院ではなく医療センターという名称にしたのは、『病』という字を見ると、それだけで元気がなくなってしまう気がするからです」（山田氏、以下同）

世界第一号機を導入

しかし、それ以上にこだわったのが、名称に含まれる「中部国際」のほうだという。元の病院名の「木沢記念病院」は一目で民間病院とわかるが、山田氏はそのイメージを払拭したかった。早い話が「官尊民卑」への抵抗だ。

患者のニーズに応えることを最優先し、病院運営をしてきた山田氏

は、フルボディのCTスキャンやPET（陽電子放出断層撮影装置）を東海三県で最初に導入するなど、大学病院を超える医療レベルを維持してきた。しかし患者は、がんなどの重大疾患が見つかると、すぐに大学病院に行こうとする。

「どんなにレベルの高い医療を提供していても、民間病院というだけで一段低く見られてしまう。だったら民間病院らしくない名前にしてしまおうという発想でした。公的なイメージを持たせるなら『岐阜』もありですが、それでは海外の人には通じない。セントラルジャパンを印象づけるため、『中部』という言葉を入れました。岐阜県知事は苦笑いしていましたけどね（笑）」

病院の移転は今年一月に完了しており、現在は診療も通常稼働中だが、陽子線治療施設のオープンは来年にずれ込んだ。アメリカのメーカーが、コロナ禍で身動きが取れなくなったためだ。

同センターで使用される予定の陽子線設備は、アメリカの放射線治療機器メーカー・バリアン社製の「プロビーム」。世界に先駆けて第一号機を導入することになる。

「国内で導入されている陽子線治療の機械は日立や住友重機製がほとんどで、同じものを入れたのでは差別化はできない。他の地域でも受けられるのなら、わざわざこんな田舎に人は集まらないでしょう。放射線治療の老舗であるバリアンの陽子線治療機は、重粒子線と同程度の出力ということで、治療期間も従来のものより半減すると聞いた。総合的に考えて、導入を決めました」

アメリカの中間層を呼び込む

陽子線治療のターゲットにするのは、アメリカからの患者だ。実は山田氏は、世界最大の奉仕団体・ライオンズクラブ国際協会の国際会長を務めていた関係で、コロナ前は頻繁に渡米していた。そこでアメリカの医療格差を目の当たりにしたことも、米国製「プロビーム」導入の一因となったという。

「アメリカでは中間層の年収が二千万円クラスですが、高額な医療費をとられるため、風邪でも病院に行けないと言う人が多い。そんなアメリカで陽子線治療を受けようとしたら、二千万円はかかるのでとても手が出ません。当院で治療すれば、往復ファーストクラスを使って、滞在費を加えても半額程度です。アメリカよりもリーズナブルに治療が受けられ、しかも装置はアメリカ人が最も信頼している自国製。多くの患者さんを呼び込めると思います」

アメリカの中間層を呼び込んだ後

は、そこからの広がりにも期待している。

「巷にありがちな医療ツーリズムと違って、私はことさら〝富裕層〟をターゲットにするつもりはありません。ただ、アメリカから多くの人が訪れる病院として話題になれば、国内からの患者さんもクチコミで増えることは予想される。その際は自然な流れとして、富裕層も増えてくることでしょう」

現在は、国際的な患者の誘致に取り組む最中だが、理事長自らも動いているという。

「アメリカから中部国際空港への直行便はストップしていたのですが、ハワイ便が再開したんですよ。まずはハワイから呼び込もうと、ネットワークを作っています」

同センターの個室病床を見学して、その豪華さに驚いた。床面積三十六・九平方メートルの特別室には、ベッドのほかに応接セット、テレビ、流し、冷蔵庫、バス、トイレを完備している。これで一日三万三千円（一泊二日だと六万六千円）の差額ベッド代だという。都市部の病院で同じレベルの病室に泊まろうとすれば、十万は軽く超えるはずだ。

下呂温泉からの通院も

もちろん、近隣の観光地に宿泊して通院することも想定している。

「当院まで一時間ほどで通えるエリアには、温泉地の下呂、鵜飼で有名な岐阜、城下町を楽しめる犬山がありますし、名古屋も対象になると考えています。長期間同じ宿にいると飽きてしまうので、ある程度の期間が経ったら宿泊先を替えていくのも良いかと思います」

同センターには健康管理センターも併設されており、人間ドックでのインバウンド需要も見込んでいる。

「検査前日の食事等に制約はありますが、三日程度の周遊型を想定しており、厚労省や美濃加茂市の事業の一環として、モニターツアーを実施しています（二〇二〇年度と二一年度はコロナ禍のため在日中国人を対象に実施）。本年度は中国からモニターを招聘して実施する予定です」

＊

メディポリス国際陽子線治療センターと中部国際医療センターは、性格こそ異なるが、「陽子線治療」という技術を起点に、国内外から患者を呼び込もうと様々な試みを続けている。彼らの取り組みは、日本の今後の医療にとってもヒントになるはずだ。

そして、粒子線治療の進化はこれからも続く。誰にでも手が届く治療となる日も、そう遠くはないのかもしれない。